

古今傳日誌
七月三十日
可降

特別
14
1919
541



西に二十七年七月次降
十古樹り依

一日

時、突如云し、吾等を破り居の云
中一、つうこ子んの軍衣を道せしし
ことしき、吾等依くす、とありし
麻の軍衣をり着す
例る依るを旅者五冊を心を盛
夏報と人集しとせ、就彼又や報
しと書き如也

在京都にて中村通子とて侍るべき
の御息あるに、瑞吉と保津川の魚
端を畫きあはせ、進子塔士の町を地
川口を上下し涼を納んつゝあること
又えんじと飲るん
町を以つて圖書館を閉じし事
終るべき事のごとし、十時より冬館
二三日、事務をこたへし
在雪存のゆきとらとて未考とせし
出京中の謝状、歳々ふ、又は
お代をりあるを候存し未考

梅可

風来山の長松禱人の歌を讀むに
んを久しく其の名をぞよき如く
眼をばらむの縁横の借杖を人
しんをばらむの縁を解しむる
しんをばらむの縁と溜め可
うけしは月をまうに杖を合持す
をよき大なる提出するべき事候
決す

二日

晴、夕暮法軍者に出氏のこと

加有の終由りし事訪あるはる事
撰ありしを撰あり

四〇

明、よあゝゝ冬夜終終をこゝろ
よりこのゆゑと聞ゆ終終をこゝろ
口の活況をよとよと西田董枝作
く木行のゆゑを聴く西田の
筆執物の扱扱を終終をこゝろ
よもよも作る木をよ氏物語を
論し七のよもよも終終をこゝろ

三法ありたりし事訪あり

五〇

明、よあゝゝ加はる、冬夜終終を
きりし十のゆゑと内子と終終を
撰をこゝろと撰のよと、終終を
三井のよと撰を撰をゆゑと、終終を
又あゝのゆゑと終終のよと、終終を
兼し涼を納る、思ひのよと、終終を
漢夫法ありたりし事訪あり

時、直つに桂次郎へ来て者、接す、こ
りもさきしり者、此にあらざる及て、子
に 考致、故、負、七、令、り、高、中、及、期
休、暇、中、一、整、理、し、る、き、事、務、の、分
擔、を、定、む、り、の、後、も、社、員、令、を、互
ら、き、十、三、名、評、議、員、令、に、附、す、べき
議、案、亦、一、紙、に、討、議、す、在、終、り、の、夕
刻、と、し、大、隈、任、命、に、大、つ、ま、に、是、を、進、呈、
理、委、員、令、を、解、す、任、と、し、晚、飯、
の、後、心、を、な、す、時、に、此、の、事、と、し、其、を、進、呈、す

関する報告をとり、九の教令を、波
多、地、精、一、と、し、大、口、洋、州、の、途、に、上、る
旨、も、後、し、来、り

時、と、私、之、旨、を、所、當、の、諸、君、に、告、げ、我、令
斗、吉、務、と、案、件、を、流、し、休、入、り、令、旨
斗、上、し、る、に、付、來、訪、者、と、し、大、口、洋、州、
歸、務、を、な、す、表、干、し、の、後、も、増、給、し
沙、由、を、為、す、甚、と、交、報、を、奉、り、し、相、入
入、り、細、谷、要、所、に、以、て、自、文、に、一、年、訪、問

と浄の途に上りて付見返ししお新橋
に接し、田原素訪に存せ敷分弁上
の件(決り弁を十月に神無忌にすこと
終り弁に終り弁を終り代りて自
今獨りしを終り弁の文出とありたり
へいりて付)に根拠し一二の案案
を主として、今細々提供するの
念と立ちしり、本業式に法説を乞
ひん為、久保田文忠を請え、云々す
多忙に成るべくも、成りてより、
井原素訪に、と記し、云々、云々

の途に上りて付見返ししお新橋
に接し、田原素訪に存せ敷分弁上
の件(決り弁を十月に神無忌にすこと
終り弁に終り弁を終り代りて自
今獨りしを終り弁の文出とありたり
へいりて付)に根拠し一二の案案
を主として、今細々提供するの
念と立ちしり、本業式に法説を乞
ひん為、久保田文忠を請え、云々す
多忙に成るべくも、成りてより、
井原素訪に、と記し、云々、云々

十の

山井伊霞本寺訪書に細信を乞ふ
早稲田大子と云く、素素と云く、
山井伊霞本寺訪書に細信を乞ふ
早稲田大子と云く、素素と云く、

明元、拂嶋比害あり、好め奉訪、
邦望を尋ね奉訪、高橋徳三の書に
接ぎ、奉る為報を奉りし詞を奉る、田
中隆之書を授けて事奉を授け、作
る木義山物外、身告あし奉訪、

十六

墨天ありの取明、本のそ授くとも十
八日飲ぬ(来月)に致せ既七此ゆゑ
り(四)を奉り奉り方ありなる報り、納
付、三牛の貯る報り、預け、呈

廿日三十製は白原し世に代渡
ありとせより持て、物を辨か十
元贈るし為也、十打通午(来
書あり、晩ら江部(五)等奉訪
あり、奉る為報を奉り、十者敵
の二個(河)國摩天(飲)を運(懸)我軍
者(足)の報り(了)部(外)：出つ

十九

情明、山川(流)大徳(寺)を奉りし借(奉)奉訪、
か奉り(り)る(奉)奉り、井伊(殿)奉の本(の)書(に)接

このあはれ、もろもろの外に出せしめて
らん此、家をそらむと、産儀するとの
あはれ、家をそらむと、産儀するとの
物有ることを先おしめ、江部例
う儀をそらむと、産儀を教はり入来の

念二の

快晴、筆を友梅をすす、軍國旅起方
五書を生かす、いんき日夜初るは、
了る主要記しを記し、そらむは、
切接を強うつけ、儀のそらむは、

とて、いんき、開戦以来、朝野の
業也、而して、いんき、十有、
記、青、按、お、鉛、走、る、
誤、よ、り、の、甚、極、を、こ、
の、起、承、轉、合、吉、原、談、
作、久、百、来、く、を、能、
向、け、出、る、方、を、致、を、
社、の、通、儀、を、按、由、し、
出、し、け、る、也

見送るも深天而も雨を降らざる
くか蒸ししそきこと亡く方
帆是聴松 帆 帆 帆 帆 帆
あや日依れぬあまの山依大画
の山あまの山あまの山あまの山
あまの山あまの山あまの山あまの山
軍一奪河を距る十八里細河沿を
占領せりとの快報に接する
聞しぬらば手紙を不意に
時頃し軍富給るも一助と天地を

えむうと海ししうううううう
うううううううううううう
うううううううううううう
うううううううううううう
うううううううううううう

小雨、日曜、家方未訪ありと
訪る高安を集しめぬを
一二日、出陣し候るに
已、日以、事訪文あり候
新しうと傳入を候るに

刻しつて遊と高紙し侍り定らざる
金を経るるらと既在し者と云ふ
決し二の物書、其の及保を事す我
軍言口系、大石橋に飲の被り
外四船の露艦、今午捕せしむり
つら

念せる

考望氣湯天並ありや、申に六人
方々、あつた御申を、えん、サの由
冷、あつたも、えん、あつたを、

しと軍と堪る御造し、まを、
まを、親、親、親、親、親、親、
と、原、原、原、原、原、原、
表、表、表、表、表、表、
その、その、その、その、その、その、
親、親、親、親、親、親、
と、と、と、と、と、と、

念する

墨天あしあつた、あつた、あつた、
リ、田、田、田、田、田、田、

如伊四子院家タシヌシヨウ傑位
鬼の掬瓶をやく十二の物也、筆
交紙を筆しすのを消す、

念九

曇天、中野睡氣をそえ、元氣人と
其の地くさるる天候んくさるる
在奥四山山とて、縁路をの消り
リ、中野くさるる、試路を消す
々し、来り、来りあり

三十

雨すの米以晴天をのす、江部
夫茅々々、くさるる、節を
坂、五山、くさるる、花
豊山、くさるる、あは、ち
今行、くさるる、地、車、雷
し、元氣、くさるる、早稲、大
創立、紀、式、地、を、
真、紀、を、紀、を、
午後、くさるる、小、後、を、
初、くさるる、古、在、米、聖、路、易、直、路

黒木軍一榎樹林子及様子欲附しを
見領せり敵を討て攘しとくとの公報
出づ

三日

墨十の頃より大向ありと、葉原渡舟又
終りて来訪、多岐らるるも山田宗茂
を討て、又中へ念松山を攻め、吉原
へ歸し、御志を辨ひ、つゝも持をこ
一二の目を許し、御志、大関誅す
公集、度し、不旨出征し、既と松山

来り、旋りて、其の久保五郎重一終り
し、白旗の儀を更らざる五冊を心
凌日為、命題す、折木城に領の
報あり

四日

朝年小雨あり、此秋年涼氣候の
如し、云持を、月夜と、手領す、凌
日為、御志を許し、つゝもを清らり、御
志を拉して同心所の御家と思ふ
御志を、御志を辨ひ、御志、御志

左飲の報到る、おむのの江大激震
ありし

五日

と乾大の遠き處を念たり子女共
侍らるる所の甘きと云ふは流傳
四谷のむき、きんらるる電をのん
くせし、更ら、雪をのん大来り
己回亦ハ星家(國)を結ふゆにき
十二的、折ありふの行府をいふき、納
涼三時ごろのぬ流をるるゆにき

更ら、雪をのん上りて、控に湖
と甘き、折ありふの行府をいふ
くせし、更ら、雪をのん大来り
己回亦ハ星家(國)を結ふゆにき
十二的、折ありふの行府をいふ
涼三時ごろのぬ流をるるゆにき

七日

晴、前より引流、毎朝必と課す
と、折ありふのぬ流をるるゆに
市嶋、靴三の動行、接ふ、靴三ハ

衛の赤く接す、心人小見寺一州大来
伝、凌若紙と草子し地と課す

十日

晴、山崎本所岳河外と陸木、走るなり本
功九月より、結内、男、挿用と法夫
左、雪奈、地、名、と来、古、あり、と、直、為
行、健、増、子、と、下、り、と、古、と、此、つ、の、波
男、和、と、草、子、と、周、聖、教、の、事、あり、と、
云、こ、つ、き、吊、一、詞、と、云、と、云、と、の、事、あり、と、
の、古、に、接、す

十百

晴、谷、聖、教、の、事、あり、と、江、部、原
夫、の、古、に、接、す、早、川、早、流、板、反、根、本
漢、下、り、と、上、り、編、り、と、林、堅、三、一、高、山、
其、集、事、抄、り、と、石、井、藤、中、り、結、り、と、
其、事、抄、り、と、り、の、事、あり、と、海、色、と、云、
并、り、と、し、り、骨、川、在、海、寺、と、接、り、と、坂
本、嘉、次、馬、と、古、に、接、す、洋、行、中
と、し、周、山、新、板、反、景、山、鋤、吉、切
朝、の、外、来、流、と、し、相、り、と、云、と、柳、り

十二日

晴、兜に保す、坪の道邊を訪めて
其の裏に「海防」の朗讀をやぐ
十一時過ぎに矢張り館を去る
午後二時過ぎに「海防」を告げし
木入、十日迄順沖大海戦の詳
報歩々お多報おを以つて若志
せし

十三日

晴、朝来蒸す、兜に保す、関に泰
輔也上し侍る自來法あり、監官二天
正記を後みし波のあおをせし
を然す、十三日の海戦に敵の海軍
司令長官戦死、報を達す、長身数の
未だ多し、内由人をしりて居りし、
お入るも、後おも本記

十四日

晴、殊に夕暮の古しきを愛ふ山田

書兵直時、此城に前川を事を取す
平田仲次郎、来訪あり、我上村艦隊
浦位艦隊と、お馬海峽に控る文、我
中との報出つ、歸て五的川戦開の如
果敵艦リニューリックを奪ひ、沈し、他の二
隻は大損言を與へ、遂に我艦隊、軒
傷との公報来た、此後、田原、小津訪
ありし、小村の、無木武延、ありしを、死
め、并、渡士、聞、此、未、の、旨、報、し、来、り

十五の

日吉天、山嶺、の、辰、折、舟、訪、由、死、を、恐、る
え、兎、と、謀、す、凌、易、を、報、を、事、し、し、
敵、を、慰、す、

十六の

時、我、我、一、二、の、艦、隊、を、遣、り、中、村、道
子、の、舟、を、事、取、り、或、舟、を、事、取、り、
由、日、し、故、移、し、来、り、兎、兎、我、病、を、
お、田、道、の、舟、を、遣、り、兎、兎、謀、す、校
友、三、原、義、人、の、舟、を、接、す、

十七日

晴、兜と深き、十元寺一河を平事訪あり、其
時付傳とて三句記極出敗し付る細書
ありし、横井的冬より接り、波日名
部を平し一河を老る、十山島子田仲
少一縁傳し傳る自年訪由子平極あり
山の雲ありし、関口泰極し付る老
書を得る、初降軍使を旅順敵軍
に差老し流分授出つ

十八日

曇天、此、深き、清も老味、
清く、いぬ家身事訪ありし、軍使是
老し結果とて敵を初降の報し七
七聖方より一七の括流の返るるに
事ありしと授出つ、波日名部を平し
しありし入つ

十九日

晴、晴り、七山林堅と事訪、直に
城とて老る、即ちし、事ありし
十月節白の河し、初るも、初るも

増の所を中居殿にお母方、登壇す
と名を、田原と銘を十三の物書、未三
十日増内鏡雖大石増を(新記)桑式
三行考典とまじりて、関の泰納山一の
号録を七、宗千新録、如く事、法し、
とて十、増を、田原と大江と、
す、池の龍、(新記)桑式、
又増井の字、の字、増す

念九

昔且次、朝年、所屬を、
在

奥直流、(新記)桑式、
印、事、(新記)桑式、
お推の、(新記)桑式、
物、(新記)桑式、
七、(新記)桑式、

念九

昔天、(新記)桑式、
森、(新記)桑式、
二、(新記)桑式、

是れを、及所を、入すやと謂ふ、
大坂中井新三郎一しし来行あるに在奥
正流とて三過の待るべき清忠とて
六月廿余とて是れし者我接子の
執持しむる、徳寺一為氣とて其の
故のみの此の麻痺を起し、
急急の手申と施し、
吾和のあまう、
和の門を叩き、
十一の半に終り、
一人を施せ、
其の他一二の件とて、

す

三十の

而風、
朝経、
此葬式、
山人の墓、
鞆、
んを、
身、
す、
徳寺、
葬式、

小雨、多能寺の表久井所十 寺之松元徳
堂之葬式と云ふ、坪内高田を以て
登殿二三の事然と云し正午家々
帰る、多能寺と銘録に書詞を
七夕刻りある、書を家方ニ呈して申
を托す、方橋海三来訪あると、坪内義
衛通回礼の為申訪あると、晩夕後以
生江郎小柳小杉等交々十年玩鈴
木老在居りて其るに接す

九月

一日

夕の二言十也朔来風多し為を交ぬ
ぬも古しきるゑく北老くく来行
ある、少林澄三カ藤葉也と根き彼
務と云ふ十の、を彼、彼を
其集して開彼准十也を如正多女
二の物也、家弟来訪、多田神道のみ
要生し、多の科を新録、老し
八十五日修也、内十日利家清利子
交新く是八、十日并後士洲隆ん

あやうし後す、後すを承とすしとある
る。伊豆中の事家ぬに二京絹
を贈る、能田るんか持する、遠山
大捷の情状あり

二〇

晴晴、北む、金三丁内御役め給るし
是れ迄、佛事一の事由と給ふれ也、
少田ま夏川しと少田鉄しゆに昔光
を授けし来り、関に奉轉来切、冬、
抗給給、をさる、大坂、用くまき珠

昔念給る、このまや井新さる、節む
をさる、この取給給、臨後の切通せむを
思ひに取給給、記念し、為知友しと給
る、このまを集めんと給し、給る、このまを
考し、臨後のま給給、をさる、このまを
給る、このまを、祝ふ心を、後、取給給、を
ひりまし、家、益あり、而、而、のし、
手事とせし、延引の、給給、をさる、このまを、
ま、あり、而、の、給、を、このまを、奉、上、飲、の
記念、を、さる、と、給、し、其、母、与、改、め、し
知友、に、持、来、り、而、に、廿、十、数、取、に、給、し

を差出す

三日

雨、考や少く、決り着録を申さる、直に
吟行紙の書きあはる

四日

雨、日曜、徳重を申あ来た、よぬ家才本
訪、明日は文治市本流、遠山と
領の分報出づ、是ん定る、千古と快
事、めんか新家のあはる、祝せたる

得んや、紀念行をいふき、早稲谷十次より
到る、えを先を才一とる

五日

晴、朝来法友より遠山に飲、紀念行
いふき、続々来た、井治の句をいふ、日いら
く、情絵の飲す、心は、冬後、終始
をいふ、お川の別、博士の花、吉を圓
寺、鈴、新、うをいふ、朝来
丘、指、お、た、い、く、夕、陽、流、く、家、い、ふ、
川、の、花、を、い、ふ、
る、
お、
終

時、登枝院を以て、川田園の整
地未以る、考に教を、直に院
地を以て記念傳ふべき事、然るに
寺、堂師の神院の念の言、以て
修業と三句の紀院標題版下、ちり推考
を以て却て、寺の院を以て、
その院を以て、寺の院を以て、
其、北寺を以て、未書あると九の五、
寺の院を以て、寺の院を以て、
佛事お言ふ、其の十の五、
佛事お言ふ、其の十の五、

こ上りて故也

九の

時、登枝院を以て、川田園の整
地未以る、考に教を、直に院
地を以て記念傳ふべき事、然るに
寺、堂師の神院の念の言、以て
修業と三句の紀院標題版下、ちり推考
を以て却て、寺の院を以て、
その院を以て、寺の院を以て、
其、北寺を以て、未書あると九の五、
寺の院を以て、寺の院を以て、
佛事お言ふ、其の十の五、
佛事お言ふ、其の十の五、

待うき、到来、移す一三西程
い圓中より粒々笑荒の花殊々佳
也、愛余くきし、豆らうこふ久北
とせらゆり物あらうか、中々見そ我
入りのまじし、こころに決し、飯ゆ何
畏むまこ方、言当こし手続を力
す、市士見そ我、粒々を懸け
内のしりらあ、こころは入るを許さ
いる物親ある所也

九月十日

まあまこころ二十りの、たのむ人々、心
の面々も、雲のそ、天の氣、清朗風心
をせし、子たわむ、歡光あつるまき也
井伴霞本來派、和らぬ、佳すの、柳行
梅す、板友三木、ま、常、味の、海、書と
高し、手紙、冬、お、彼、物、を、ま、ま
帆、是、聴、松、り、り、紙、ひ、く、く、う、つ、ま、
如人、お、み、吉、を、思、ふ、四、の、路、も、日、本
橋、の、ゆ、ら、る、お、を、購、ふ、六、山、の、手、お、書、を
流、の、流、し、松、山、中、に、荒、干、し、三、圓、書
を、購、ふ、故、に、備、付、し、め、也、十、五、日、持、え

凱を以て念給るべきに到る

十百

明日唯、家弟米坊も、高不、奇然
初候又、如く、奇然、平、荒ぶ、の、事、業
を、必し、止む、を、清く、梅、屋、と、也
刊の手、別、紙、法、を、五、と、年、江、印、来
預、北、者、と、し、五、的、方、海、者、と、言
被、あ、ら、し、四、的、と、し、上、等、精、養、取、電
於、江、津、師、に、行、合、と、あり、行、く、る、三、十
名、行、来、令、九、的、物、也、家、人、生、苦、

不在中、此、所、何、事、一、事、り、訪、ふ、と、十
一、の、し、北、者、久、日、付、く、と、物、也、此、日、の
此、二、三、日、の、云、々、と、記、せ、し、を、誤、り、と
と、あ、ら、し、二、三、日、也、保、し、平、穩、に、時
日、と、共、さ、る、事、

十百

是、日、早、朝、侍、務、伊、三、と、申、候、事、候、也、冬、後
節、候、を、あ、ら、し、ゆ、あ、ら、し、呪、と、課、す

雨のふ、桑田を風のきち、松あり手残旅
法し、い、道し、也、北東、い、い、西、舟
其、隠、も、一、行、の、久、し、く、そ、う、し、一、尾、の
す、し、し、を、休、補、へ、移、ら、れ、し、云、く、の、法、あ
こ、お、ん、し、う、い、う、せ、ま、さ、さ、さ、し、と、一、上
北、を、大、い、な、湯、と、あ、ら、せ、ん、な、う、石、隠
書、を、目、目、と、丹、と、あ、ら、ん、修、路、中
い、執、北、を、い、ん、な、移、ら、れ、上、と、久、し
大、原、信、守、家、に、托、し、置、け、る、家、什
一、切、を、い、ん、な、移、し、北、を、の、用、に、供、え、る
也、也、是、松、波、隊、を、忘、し、お、ろ、う、た、に、を

拙者、景山、鍋吉、に、ち、ち、接、す、松、本、忠、流
直、時、お、の、ら、し、来、信、ま、す

十四日

明、横、井、の、左、来、流、冬、松、波、隊、を、忘
す、お、ろ、う、た、に、を、忘、し、お、ろ、う、た、に、を
秋、流、と、い、ふ、あ、り、伊、藤、候、の、吉、原
よ、け、の、あ、秋、流、を、訪、ひ、の、ゆ、也、其、六
時、信、流、と、い、ふ、紀、の、櫻、屋、と、い、ふ、行
信、ま、ち、ら、ん、き、と、い、ふ、来、信、ま、す、先、に、謀、る

三教色外証を二三書と高くし、
又予の修徳を先とし、
己の家身未だ、
城の境唯五十リ分
のあいこゝあり、
年々、

十八日

日曜 終りの風あり、
國井寺尾未だ、
睡り曰はゆ重三未だ一身上うろろと云
りしと云る、
此を初説す其味没具
寺の庭草をとり、
三教色と
讀むるよりのを消す、
夕刻廻り

畏りし一年訪お推しえ上り梅川
に携り、
古意心遠玉を(川念)行(徳)徳(木)が
為に人々を、
月念をとり、
未だ古江より、
月をめぐり、
初年あり

十九日

雨八月十日陽豊山の信を、
久保の古流未だ、

仇も海と望葉を供へて月と也
併し海雨をさしと七月、仇云
志保等、不吉鎮之横濱支
店（あつり）、格勤のみ出字し致報
一奉る 余書

念考

雨、口賀、朝来山之お母の松井某、
昆由文等し才身上の伴う聞し、（子
中子所、原友地借入、伴）、（奥に春城
草文に来訪ありし、心ありきり、皆教ふ

向き、（格勤）、（お母）、（鎮し）、（ゆし）、（ち）、（を）、（扱）、（す、
夕何らとを春城湯具とをさし、（洲を）
入、新望来あり、（あつり）、（建印）、（勝）、（子）、（父）
死ありとも、（吊）、（状）、（と）、（送）、

念考

皇天、（冷）、（氣）、（を）、（ち）、（し、
校及井伊霞を林
瑛乃上のす、（つ）、（き）、（も）、（訪）、（山）、（留）、（若）、（株）、（塚）、（谷）
（ま）、（ち）、（り）、（し）、（海）、（寺）、（を）、（興）、（ふ）、（山）、（一）、（の）、（ち）、（に）、（接）
す、（若）、（枝）、（節）、（松）、（を）、（愛）、（す、
昆由文をこみ、
名下、（重）、（光）、（の）、（つ）、（と）、（聞）、（し）、（う）、（向）、（と）、（祝）、（す、

沈来訪、予多病、病花、昔を投す
之竹、是を招り、集令と云、金曜、命を再
く奪つ、物と出く、物と入く、坪谷長
甲一の親我、淡米、四を物朝の
後、田一の侍、説多、沈を、こ、十、の、沈
く、故、令、十、二、の、家、の、物、の、

〇

十月一日

沈来訪、久保田清沈来訪、小倉鎮之助
真澄、粒、沈、り、し、市、に、接、り、り、お、ひ、の、
と、し、ゆ、ま、よ、あ、ん、と、世、に、此、を、と、守、し、ん
目、黒、不、動、也、冬、結、し、角、伊、板、か、こ
飲、し、さ、ん、さ、ん、と、賦、を、あ、る、と、芝、の、あ、る、寺
に、沈、を、と、美、士、の、各、を、と、功、ひ、青、松、寺
に、詣、し、電、車、に、乗、り、て、之、を、言、家、に
へ、り、不、を、と、わ、り、家、中、を、来、訪、新、の、の、
事、終、る、あ、る、こ、

さるうた也。字解。一。朱も心も。珠。珠
流。こ。ま。あ。い。を。ゆ。ち。

こ

雨。雷。珠。珠。各。一。朱。各。一。五。路。二十。路。
月。抄。是。あ。る。伊。集。家。く。満。壽。市。一。を。死。
七。強。け。つ。更。なる。あ。お。十三。に。く。何。地。
書。而。奈。く。ト。石。の。な。る。入。由。る。ん。出。す。
こ。し。な。ん。し。吉。物。と。未。だ。一。く。ま。出。す。
石。條。三。一。一。何。の。心。表。る。一。く。吉。を。投。す。
関。心。泰。轉。未。ん。燈。言。を。要。す。吉。転。表。す。

と。文。行。す。泰。投。彼。物。を。あ。す。中。井。
新。三。一。と。流。す。物。書。収。兜。に。課。す。旋。
華。し。丹。子。新。納。題。し。す。陰。換。の。縁。
と。云。ふ。

七

明。と。如。日。留。を。流。の。佛。く。上。等。七。表。水。次。存。
可。あ。し。新。三。一。と。解。し。ま。さ。う。か。平。地。得。る。
を。あ。う。ゆ。を。ま。く。又。互。流。母。の。外。を。ま。く。
休。集。伊。集。一。新。一。其。子。料。を。新。三。一。の。
支。店。の。流。を。此。の。命。を。信。者。く。付。お。

為物と云ふ引出す事う就也本
田行是事後田之さう飛し古と接す

たり

是言及雨九月言附直流の信流を清
息利と撰井時各々清國を其一
種と改るゝんを清國を又云ふに
百々々々のよし虫を引くためう三
枝寺を中を破りて古流存を築るゝ
の事を流るゝ各枝終務と云ふるゝ
故之のよし中三曲田を改流流るゝ

再々幸田處付の物逸又その書書は
和漢刻音中史)出度一節の漢流
り新字は在る人新字内を
其の如く進めおと改るゝと進るゝし九の
おめゝ改るゝ書書は改るゝ
流不在中田をさう新字坊一
早中一也也改るゝの物相(一)丹
善有改るゝ古流改るゝ也也
井珠、休流改るゝの書に接する地
を改るゝ改るゝ改るゝ改るゝ
新来古流

松来のあまをわかれ、田をさへ久松来訪
 羽州の急塔屋に祀るあ初葉の銀のび
 寄る事倍するらるゝの存あること、田畑り
 五丁の風潮の、河をえ返るををまう流し
 ぬる、あ家をそ換屋の銀を草子とす、
 午後とて産後終結とす、松
 手原四寺の宿付、書を授す、
 左獨と鳩村派を、一とて終る、
 清忠あること、あはれとて、而風を臺とす
 一、あまの心、深ま、二、言終る、

印の告し接す、

ぬるをわかれ、産後終結とす、
 手原四寺の宿付、書を授す、
 山帝親、牛の、あまを塔屋とす、
 二、言終る、あまを塔屋とす、
 産二色、石版指狩を授す、
 貨物す、中の、あまを塔屋とす、
 印の候、う、あまを塔屋とす、
 帳冊を授す、余、あまを塔屋とす、

其一と始りぬと為す。松平家(四)と
泰山之刻(五)中一(六)名若大依(七)の四字
を造りぬく事ありとんを甚(八)漢(九)の上
置(一〇)も波(一一)く申(一二)款(一三)と云(一四)ん物(一五)也(一六)又
田(一七)造(一八)依(一九)敷(二〇)し併(二一)有(二二)勅(二三)書(二四)紀(二五)の
五(二六)十(二七)五(二八)分(二九)故(三〇)止(三一)を造(三二)る(三三)事(三四)偶(三五)々(三六)鳴(三七)田(三八)春(三九)
二(四〇)分(四一)す(四二)御(四三)定(四四)申(四五)事(四六)と(四七)抱(四八)く(四九)爲(五〇)す(五一)結(五二)
不(五三)成(五四)る(五五)事(五六)物(五七)の(五八)爲(五九)す(六〇)我(六一)と(六二)見(六三)ら(六四)す(六五)

十方

明(一)と(二)此(三)二(四)の(五)旨(六)旨(七)汽(八)子(九)を(一〇)地(一一)を(一二)い(一三)つ(一四)物(一五)を

うりき由(一)ふ(二)回(三)付(四)方(五)名(六)占(七)の(八)事(九)を
送(一〇)、若(一一)杉(一二)掛(一三)の(一四)刻(一五)石(一六)を(一七)志(一八)す(一九)め(二〇)林
石(二一)を(二二)測(二三)細(二四)し(二五)て(二六)一(二七)二(二八)の(二九)石(三〇)を(三一)集(三二)り(三三)し(三四)し(三五)
こ(三六)し(三七)汽(三八)子(三九)を(四〇)御(四一)定(四二)申(四三)事(四四)を(四五)結(四六)す(四七)事(四八)
詳(四九)し(五〇)漢(五一)分(五二)の(五三)事(五四)の(五五)回(五六)字(五七)を(五八)見(五九)ぬ(六〇)向(六一)合(六二)
る(六三)事(六四)毎(六五)回(六六)、結(六七)し(六八)て(六九)を(七〇)視(七一)る(七二)事(七三)也(七四)
物(七五)書(七六)、其(七七)由(七八)於(七九)海(八〇)山(八一)の(八二)所(八三)有(八四)る(八五)事(八六)
が(八七)し(八八)古(八九)く(九〇)接(九一)多(九二)又(九三)、石(九四)在(九五)や(九六)七(九七)田(九八)鎮(九九)
三(一〇〇)年(一〇一)坊(一〇二)、田(一〇三)を(一〇四)と(一〇五)久(一〇六)氣(一〇七)事(一〇八)に(一〇九)玩(一一〇)ら(一一一)ね
二(一一二)九(一一三)分(一一四)有(一一五)り(一一六)し、度(一一七)二(一一八)万(一一九)の(一二〇)出(一二一)入(一二二)の(一二三)事(一二四)
也(一二五)

西、可、能、を、し、各、校、館、を、と、り、ま、す、中、井、
新、一、年、法、を、し、信、長、宗、法、に、お、か、
信、長、宗、法、に、十、井、自、意、を、お、か、す、
政、心、の、ち、を、お、か、す、
各、校、を、し、し、し、大、捷、を、得、
と、の、情、情、を、し、

西、府、の、北、を、あ、り、し、
中、井、と、し、し、し、し、し、し、

物、商、二、百、法、校、の、伊、東、を、あ、り、し、
人、を、能、く、し、し、し、し、
中、井、と、し、し、し、し、
閑、館、体、を、し、し、
校、館、を、し、し、
由、り、し、し、
轉、來、訪、を、し、し、
法、心、法、の、使、し、し、
標、題、の、こ、と、を、し、し、
と、の、情、情、を、し、し、

をあらへん出ししつアんバムに張付けよ
日を清り、休養法并祈

十考

晴、池、徳、珠、浪、境、に、古、書、と、あ、ま、ま、と
表、干、の、ま、ま、を、得、ま、ま、の、推、め、く、海、と、こ
終、る、之、を、捨、て、ま、ま、の、推、め、く、海、と、こ
一、部、一、事、法、を、ま、ま、の、推、め、く、海、と、こ
ま、ま、の、推、め、く、海、と、こ、の、推、め、く、海、と、こ
を、約、ま、ま、の、推、め、く、海、と、こ、の、推、め、く、海、と、こ
を、約、ま、ま、の、推、め、く、海、と、こ、の、推、め、く、海、と、こ

十一考

晴、幸、老、坊、如、(鈴、木、和、兵、衛)十、井、お、お、
に、和、山、ま、ま、の、推、め、く、海、と、こ、の、推、め、く、海、と、こ
お、ま、ま、の、推、め、く、海、と、こ、の、推、め、く、海、と、こ
に、お、ま、ま、の、推、め、く、海、と、こ、の、推、め、く、海、と、こ
上、院、法、名、(里、ま、ま、の、推、め、く、海、と、こ、の、推、め、く、海、と、こ)
行、う、ま、ま、の、推、め、く、海、と、こ、の、推、め、く、海、と、こ
お、ま、ま、の、推、め、く、海、と、こ、の、推、め、く、海、と、こ
お、ま、ま、の、推、め、く、海、と、こ、の、推、め、く、海、と、こ

申しし東書ありと知り大徳住甲が甲
方の開帳の板有るを疑ふありき余
七日行きてしとき（此紙七的二十分中）
停車休む者三十百由字く爲言也（直ら
ず承流の方をみるゝ、のみ多押あり人を
し書不印謬を疑ふ又古画帳の紙を
を一二語説く、托す、疑る見ざるをのり
授けられしを著しし、和田着走の書
に接す。

念九の

少ありし、とゆは、高、ひまふ、様考、二書と

世の、と紙七的、二十分書、疑ふ、は、是、紙
ありし大徳住甲、と、信、從、甲、あり、の
途、う、う、田、り、う、の、た、り、深、の、田、中、也、甲
ありし、と、る、と、司、の、板、を、と、ぬ、に、十、二、三、と、是、
徳、住、旋、つ、と、ら、せ、し、こと、あ、ん、を、も、疑、る、者、
後、さん、と、ゆ、を、け、れ、初、め、の、紙、り、也、甲、方
に、六、的、の、り、さん、を、進、す、紙、り、不、使、不、紙、を、ん
ハ、う、ま、る、テ、う、億、を、進、す、し、て、る、善、あり、也、不
佛、を、子、と、半、一、の、う、ま、る、甲、中、紙、の、際
る、と、る、し、不、も、長、き、條、を、る、と、る、こ、う、
ふ、十、分、を、と、る、う、一、車、中、紙、の、法、論、也

行く山中系松野谷に血の海あり其甚
是樹林を飾りしと樹ありしと由
嶽を望むと意あり也天休未と
さるる也此の山は清嶽の
原也又さるる行くこと里餘ありし能あり
平木とさるる用意ありしことさるる也
此の山は松野谷に山の中の一松あり
也此の山は一帯の溪流ありしこと
川とさるる北川の流ありしこと
奇嶽快石或は傳く或は言く或は
従事して元日を麻し或は流しあり

流を原に言ひるる也善し新馬の
義以上の流也余等此の山は
くさるる山をけし異仙橋を流し
申しと仙橋流仰て是の山を仰て
伏しと仙橋流を元とるること
此の山はマツノ山と云ふこと
すべしと云ふ事ありしこと此の山は
能ありと云ふ事ありしこと此の山は
仰てと云ふ事ありしこと此の山は
此の山は元とるること此の山は
す此の山は元とるること此の山は

十考

國書元、或曰、形、快、喜、味、之、味、之、味、
を、持、し、て、事、を、測、ふ、大、政、の、若、下、流、の、
亦、多、古、物、を、是、る、を、言、然、し、約、あ、る、大、
體、存、る、依、由、意、を、貴、く、い、ま、け、ん、わ、め、也、
谷、次、久、故、者、を、扱、す、十、二、日、刻、を、こ、の、古、而、
！、あ、る、を、是、也、甲、州、紀、行、を、首、し、
小、り、を、消、す、三、木、武、志、を、衆、御、流、者、也、
友、中、く、み、す、

十考

頃、田、書、し、備、を、ま、ん、し、し、旅、め、を、ま、ん、
考、及、彼、故、を、ま、ん、又、高、益、を、ま、ん、
し、し、と、ま、ん、を、ま、ん、後、者、を、ま、ん、
什、吾、若、干、と、提、其、子、又、右、鐘、外、五、三、
の、五、印、を、扱、す、細、微、を、辨、す、事、務、を、
日、會、し、し、を、ま、ん、上、下、通、り、中、に、也、
考、と、其、の、幸、向、り、を、ま、ん、し、し、事、務、を、ま、ん、

十考

頃、日、の、文、治、甲、の、考、し、扱、す、尾、中、國、
事、務、を、ま、ん、城、内、を、遊、歴、し、後、こ、の、事、也、

めはせたる、らんま堀の所の舊代を
至りしを堀をせんかき堀をも存せざる
の由、多るの史の材料とせざるに
君也一本を腰帯と銘せしゆえんと
す、喜代四本抄、

廿四

快心、此は名所、本由行舟の昔と他
とて来古あり、寸陰換御心を惜み、
冬後彼處とあり、本由出りしより
後の名所と接す、國井海島ありとす

司、自京平中より人を考す、城の
存りしと今も跡とあり

廿五

順、新洋勤解人、高松のしむる年
生と縁心一石は、ぬみす、孝教
孫とあり、孝教の孫とあり、國井
為事、坊の人あり、しむる年、
状とあり、本由出りし、しむる年、
口上、しむる年、しむる年、
あり、しむる年、しむる年、

坊の口實、朝少本燈三年紀より圓吉傳に
計上ししを以て定す、此を極し七りを極す
に數乘、古傳在傳とも伝記に言ふ
枕を解を是るは又新古川方に
振舞ふにんちを説く、是れ也、十
の字を、伝をよきと傳ひり、白物書、
河原を圓に新傳代物書、目
出する、一、日人伝、出する、是れ
之れなり、事伝、おろし、は、
町火を矢より二三戸隔ると也、

念分

頃、古傳、物をも、夫、飲、汁、弄、と、
弄、と、念、分、を、あ、ま、り、ま、井、珠、り、
を、あ、ま、り、ま、三、木、を、お、田、に、
之、傳、傳、三、百、分、念、分、を、
あ、ま、り、ま、二、回、昔、居、
あ、ま、り、ま、
道、教、に、
三、十、七、
河、原、
の、
氏、の、

別

三

明江部藤大目付格又左衛門と云ふ
流る、孝長執務中一吉山言傳年
百大隠存色と云ふ事あり、在外小山
温、能由之書行と云ふ、立派の格
格松の事、格松、新田光成、由
し、漢物を取らるし、吉成、四井
海部知念し、一、周知、知事と云ふ事
中考く、四井守格、一、節と云ふ事

去

四

辨、又、う、瘞、を、い、き、比、し、ゆ、あ、と、せ、る、
者、度、七、め、と、云、ふ、事、あり、
事、格、四、井、守、格、井、伊、敷、格、の、事、に
格、あり、
を、親、と、云、ふ、事、あり、
う、九、名、目、格、と、云、ふ、事、あり、
事、格、伊、藤、格、と、云、ふ、事、あり、
文、三、子、と、云、ふ、事、あり、

松久健五の著とある

七

情情、松久健五、岡井守邦、吉野武、
下、考校政務を記す、サウセウホ、
直沈の節書と接す、也と譯す、
借楽園に二あるものと、枝分也、
他、士、
悉く出、
関係をも、
を、
と、

但し、未比ニあるものと、
系、
う、

八

了、
言、
断、
を、
と、
と、

散策しきふの飲し七四巻

廿考

所、森望に未結、よる由をさるるつら
道、散策し物を解ふ、あな中下林
唯、あつ物を解ふ

廿一考

所、あつ物を解ふと云ふ、解ふと云ふ
と云ふを解ふ、あつ物を解ふ、あつ
物しと云ふと云ふ、且に、あつ物を解ふ

所、あつ物の解ふと云ふ、あつ物を解ふ
と云ふ、あつ物を解ふと云ふ、あつ
物を解ふと云ふ、あつ物を解ふと云ふ
あつ物を解ふと云ふ、あつ物を解ふ
と云ふ、あつ物を解ふと云ふ、あつ
物を解ふと云ふ、あつ物を解ふと云ふ

廿二考

所、あつ物の解ふと云ふ、あつ物を解ふ
と云ふ、あつ物を解ふと云ふ、あつ
物を解ふと云ふ、あつ物を解ふと云ふ
あつ物を解ふと云ふ、あつ物を解ふ
と云ふ、あつ物を解ふと云ふ、あつ
物を解ふと云ふ、あつ物を解ふと云ふ

廿九

明由ありり産所はけき見おしぬ物と辨
ふ、持てあはるる早りの後未だ物を得る
事、こゝろと、駿河守の関はるるをぬて
明り引つてき、終るる化り念するに
殺す

廿九

朝あつても暮あつても、縁つきの半信をうす
持て、こゝろと、早りの後未だ物を得る
事、こゝろと、駿河守の関はるるをぬて
明り引つてき、終るる化り念するに
殺す

く、物持し物被らぬと、物も聴かぬと
言ふ、物も持たぬと、其時、境川に於て
出ず、亦一回、圓の巻物を、其手に
あはせり、其巻物の、其手にあはせり、
リ、其手にあはせり、其手にあはせり、
其手にあはせり、其手にあはせり、
其手にあはせり、其手にあはせり、
其手にあはせり、其手にあはせり、

三十

明、く、物持し物被らぬと、物も聴かぬと
言ふ、物も持たぬと、其時、境川に於て
出ず、亦一回、圓の巻物を、其手に
あはせり、其巻物の、其手にあはせり、
リ、其手にあはせり、其手にあはせり、
其手にあはせり、其手にあはせり、
其手にあはせり、其手にあはせり、

高し〜をさる、其の在城〜と申行方
初来風あり

三十百

明、世を以てありき、其の〜と申あり、

此の年七月〜と申あり、
物化とあり〜と申あり、
皇軍の在提〜と申あり、
特〜祝〜と申あり、

一、此の年七月〜と申あり、
此の年七月〜と申あり、
トセ〜人 余は十月〜と申あり、
用ひぬめ、漸く〜と申あり、
山、債鬼、四圍の〜と申あり、
とあり、えん〜と申あり、
又、此の年〜と申あり、

要事

明治三十七年十二月三十日



